

村上龍の『盾 (シールド)』にみられる自己の構造

岡田暁宜

保健環境センター

Structure of Self in Ryu Murakami's 'Shield'

Akiyoshi OKADA

Center for Campus Health and Environment, Aichi University of Education

キーワード：自己，ナルシシズム，防衛，皮膚

I. 緒言

1976年に芥川賞を受賞した村上龍の文学作品には、人間の心的世界が鋭く描かれたものが多い。本論文において、2006年に村上が発表した『盾 (シールド)』を取り上げる¹⁾。本作品は短編ながら、精神分析的臨床において興味深い素材を提供している。村上は本作品の中で、一つの仮説を打ち立てている。それは人の心の核 (中心部分) はとても軟らかく傷つきやすいので、人は、様々な方法でそれを守っている、という仮説である。本論文の目的は、村上の仮説について自己の構造という視点から精神分析的考察を展開することである。

II. 論述の方法論

本論文は、学術論文として確立されている症例研究 (case study) ではない。本論文が学術論文であるためには、まず論述の方法論について記述する必要がある。文学作品に対して精神分析的考察を加えるという方法は、Freud, S. の著作にその起源を見出すことができる。その代表は『W・イェンゼンの小説「グラディーヴァ」にみられる妄想と夢』(1907) である²⁾。これは Jensen, W. の短編小説を Freud, S. が取り上げた論文である。筆者は Freud, S. が辿った研究方法を纯粹に踏襲し、『杜子春と精神分析—苦行のパラドクス—』として既に発表した³⁾。精神分析家が長い時間をかけて臨床の中に見出すことができる人間の本質を、作家はその才能を用いて容易に文学作品の中に描出することができる⁴⁾。それは芸術家があつた創造性によるものであり、それは天賦の才能であろう。我々は芸術家の創造性を利用することで、精神分析的臨床に有用なエッセンスが共有できれば、本論文の学術的意義は高まるものと考えられる。

III. 村上龍の『盾 (シールド)』

『盾 (シールド)』は、幼い頃、仲良かったコジマとキジマの二人が「自分」を守るための盾 (シールド) とは何かを探す物語である。そのあらすじを紹介する。

コジマは体格のいい大柄の少年で、親に従順で親の仕事の手伝いをする“良い子”で、誰とでも仲良くできる性格であった。キジマは痩せて小柄な少年で、親に反抗的で気難しい“悪い子”で、親や近所の大人たちと上手くやっていくのが苦手であった。二人はお互いに仲が良く、相手の前でだけ“本当の自分”でいることができた。それは大人たちの前での態度や表情と反対であった。お互いに大人の前での相手の振る舞いに、憧れていたし、そういう振る舞いができる相手は頭が良いと思っていた。二人は“自分”について疑問を抱いて、以前助けたことがある“名なしの老人”に相談に行った。二人は、「周りから良い子と言われるが、本当は悪い子になってみたい」という気持、その逆に「周りから悪い子と言われるが良い子になってみたい」という気持があること、「本当に頭が良いとはどういうことか」などの疑問を老人に打ち明けた。

すると老人は二人が連れてきた飼犬をハンモックに跳び乗らせるよう二人に指示した。キジマの飼犬のコリーは、ハンモックから転げ落ち、一回の失敗で無理だと分かって挑戦を止めた。コジマの飼犬のシェパードは何度も失敗と挑戦を繰り返して、跳び乗ることはできなかったが、最後には転げ落ちないで跳び降りられるようになった。その結果を見て、二人はどちらの犬が賢いかで喧嘩を始めた。それを見ていた老人はそれは無意味な議論だと告げ、頭の良さは誰にも決められないと語った。老人の話は、他の大人たちから聞くこととまるで違うことなので、二人は混乱した。すると老人はアボガドを用いて、心の構造について説明を

始め、心の核はとても軟らかく傷つきやすいので、シールドが必要だと告げた（注）。だが老人はシールドとは何かについては自分で考えろと教えてくれなかった。二人のシールド探しが始まった。二人はシールドの秘密が分かったら、お互いに教えるという約束を交わした。

二人は同じ中学と高校に進学したが、徐々に別の道を歩み始めた。中学2年の時の不良たちに絡まれたことを契機に、キジマは『シールドは自らを守るものである』と自覚し、自分を守るためにボクシングを始めた。キジマは高校に入ってから努力と忍耐を続けて、チャンピオンになり益々自信をつけていった。厳しいボクシングの練習に耐えて、誉められる喜びを感じて、自信の体験を通じて自尊感情が高まっていった。キジマは『自信を身につけることがシールドを形成する』と感じた。さらにキジマは幼い頃から他人が自分の中にズカズカと土足で踏み込んでくることへの不安や恐怖を抱いていたことを実感した。

一方コジマは中学では学業はトップで、バレー部でもキャプテンを務めた。だが高校に入ると競争が激しくなり、学業やスポーツに限界が見られ、トップではなくなった。徐々に性格も明るさや素直さが消えていった。コジマは『シールドがうまく働かない』と感じるようになった。コジマは昔から自分が“きれいなもの”，“すばらしいもの”，“よいもの”から排除されているという感覚、つまり疎外感を感じていた。コジマはその感覚を心の中に閉じこめておくために相手に合わせていたことに気づいた。そのためにコジマは周りを失望させないように、相手に合わせて、相手が望むような“良い子”を演じていたのであった。コジマは『シールドは自分の中の疎外感や不安が表に出てこないようにする働きがある』と感じた。コジマが想いを寄せていたナダという女の子に声をかけようとした時、ナダはコジマの目の前で他の同級生の男子のもとへ走り出した。その瞬間、コジマは自分の『シールドが壊れる』のが分かった。やがて学校の成績やバレー部の活動など、全ての自信は失われ、情緒的に引きこもるようになった。

学校ですっかり自信を失ったコジマは、就職にも失敗した。その後、なんとか就職したがミスを繰り返して解雇され、定職に就けなくなった。父親の家業（果樹園）を手伝ったが、長続きせず、挫折の道を歩いていく。コジマは『かつてのシールドが偽りであった』ことに気づいた。

コジマとは反対に中学・高校で自信をつけたキジマは、親（電気会社に勤務）のコネもあり、意中の自動車会社に就職が決まった。就職後も学生時代の経験と自信を頼りに努力と忍耐を続け、出世の道を歩いていく。キジマは『大きな会社がシールドである』と感じた。その後、32歳で会社の上司の娘と、盛大な結婚披

露宴を行い、その3年後に男の子が生まれた。キジマは会社で益々出世し、『会社、車、上司が力強いシールドである』と感じ、『自分が力強いシールドに守られている感覚』を抱いた。

すっかり自信を失ったコジマは、幼い頃に飼っていたシェパードのことを思い出し、犬の訓練所に勤務し始めた。そこで、すぐに吠えるが、実は臆病で過敏なライカという犬の訓練を担当した。コジマはライカに自分を重ねていた。コジマはライカの隠された才能を発見して救助犬として再生させたのである。コジマはシェパードの輸入のためドイツを度々訪れるようになり、独学でドイツ語を学び、少しずつだが自信をつけていった。32歳でドイツで知り合った離婚歴のある堅実な日本人女性と結婚し、その女性との関係を通じて、幼い頃からの苦悩を洞察的に修復してゆく。コジマは『シェパード、ドイツ語、妻という新たなシールド』を発見したのである。

さてそれまで順風満帆だったキジマは40代半ばに仕事が不調になり始め、46歳でリストラに合う。キジマは『自分にはシールドがない』と感じた。49歳になったキジマは『今までシールドだと思っていたものは、違っていた』ことに気づいたのである。仕事、家族、財産、自信など全てを失ったキジマは自殺するつもりで故郷に帰ったのである。死を覚悟したキジマは、ついにシールドの秘密を発見した。それは『シールドには2種類あり、自分の内部と外側にある』という発見であった。キジマは毒を飲もうとしたその時、コジマの飼っているシェパードが現れて、キジマを自殺から救ったのである。長い間、交流のなかった二人は、久しぶりの再会を遂げた。二人は自分たちが発見したシールドの秘密を話し始めた。

（注）アボガドは、中心部の種は硬く、種の周囲に軟らかい実があり、さらに周囲が黒色の皮で被われている。アボガドの構造と老人による心の構造の説明とは必ずしも一致していない。

IV. 自己の構造とシールド

本作品における村上の仮説は、人の心の核（中心部分）は軟らかくて傷つきやすく、それを守るシールドが必要だというものである。これは心的構造論についての仮説といえる。Freud, S. が Ich という言葉を精神装置としての自我（ego）という意味と体験の主体としての自己（self）という二つの意味で用いたことは有名である。本作品で、村上が叙述している心は、“自己”の意味である。本論文では自己という視点で、心の構造について論じる。

名なしの老人の“心の核は軟らかく傷つきやすい”という表現には、ナルシズムの問題が含まれていると思われる。Kohut, H. は、Freud, S. とは異なり、健康なナルシズムの存在を主張した⁵⁾。Kohut, H. はナ

ルシズムは対象愛に移行するものではなく、対象愛と異なる発達ラインにあると考えた。そして健康なナルシズムは一生に渡って続くものだと考え、それを維持する心的活動は一生を通じて必要だと考えた。村上は健康なナルシズムを維持するための心的活動をシールドと表現していると思われる。

次にシールド (shield) について考察したい。シールドという言葉には、①防御や防衛 (defense)、②遮蔽 (shelter) や遮断 (barrier)、③警官のバッジや優勝盾、などの意味がある。それらに対応して、自己に対するシールドには、以下の精神分析的意味があると思われる。

第一の意味は、自己の脆弱性 (vulnerability) に対する防衛としてのシールドである。自我の防衛機制は、抑圧や昇華のような成熟した防衛から、否認や分裂や投影のような原始的な防衛まで様々であるが、常に環境あるいは外界に対する適応的側面を包含している。Kohut, H. は自己愛障害の中心的な病理を自己構造の一次的欠損であると考えて、それを防衛するような二次的な自己構造 (縦分裂や水平分裂) を防衛的構造として考えた⁵⁾。村上の仮説は自己の脆弱性に対する防衛としてのシールドは、一生を通じて必要だということである。自己愛障害のように自己の脆弱性が全体に及ぶような病態でなくても、自己の部分的な脆弱性は必ず存在するのであろう。そのような自己の脆弱性に対する防衛は、健康な自己である程、適切に作動するのも知れない。本作品において、キジマにとって会社や車や上司は、自己の脆弱な部分を防衛するという意味があったと思われる。

第二の意味は、自己を包む膜 (membrane) や自己と非自己の境界 (boundary) としてのシールドである。自己と非自己の境界という概念は、Federn, P. が考えた自我境界 (ego boundary) を想像させる⁶⁾。統合失調症では自我境界の障害が起きる。自我境界は自我の内と外の区別をつけるために不可欠なものである。比喩を用いれば、人間の細胞は細部膜がなければ、細胞の内と外の電荷は、等しくなりエネルギー交換できず、細胞は死滅する。人間の生命維持の本質は、内と外の区別とエネルギー交換である。自己の膜や境界としてのシールドは、自己の生存に必要な構造と思われる。本作品において、キジマが他人から土足で踏み込まれる不安を抱いていたのは、自我境界の病理の表れである。

第三の意味は、自己の誇り (pride) の象徴としてのシールドである。自己の誇りは、自尊心 (self-esteem) や自信 (confidence) と密接に関係するナルシズムの表現であり、誇りは一生を通じて必要なものである。自己の誇りが形成されるには、自己の万能的な部分が外界に投影され、それが社会の中で、程よく評価あるいは承認され、成功体験につながる必要がある。

誇りが形成されるためには、その成功体験の中に本人の努力や苦勞の過程が必ず含まれていると思われる。本作品において、キジマにとっては、学生の頃のボクシングの体験、コジマにとっては、大人になってからのシェパードやドイツ語の体験がそれぞれの誇りにつながるものであった。

自己のシールドについてのこの3つの意味は、防衛的構造として固定化しなければ (部分的で一時的であれば)、それは健康なシールドだと思われる。本作品において、幼い頃には有効であった自己のシールドが、大人になるにつれて通用しなくなっていく過程が叙述されている。幼い頃に有効だった自己のシールドは、その後の成長とともに修正が求められるのであろう。つまり健康な自己のシールドには成長的側面があるといえる。シールドは一生を通じて必要であるが、修正と成長を繰り返していかなくてはならないのだろう。シールドの修正と成長は、自己と集団 (社会) との関係性の中で起きると思われる。自己のシールドは Erikson, E. H. が述べたライフサイクルの中でアイデンティの一部を形成していると思われる。ライフサイクルに沿って自己のシールドの改変がなされる時、健康なシールドといえるかも知れない。

V. 自己の構造とナルシズムの病理

ここでは自己障害 (self disorder) の一つであるナルシズムの病理を参照しながら、村上の自己のシールドの仮説について論じたい。ナルシスト (narcissist) の臨床像には、大別して二つのタイプがあり、ナルシズムの病理は、二つの極の間の連続帯として理解することができる (表)⁷⁾。

表 ナルシストの臨床像の二つのタイプ

Kohut, H.	自信がなく抑うつや活力がないタイプ ⁸⁾	自惚れが強く誇り高く自己主張するタイプ ⁸⁾
Rosenfeld, H.	薄皮 (thin-skinned)	厚皮 (thick-skinned)
Wink, P.	潜在的自己愛 (covert narcissism)	顕在的自己愛 (overt narcissism)
Gabbard, G.O.	過敏な自己愛者 (the hypervigilant narcissist)	周囲を気にかけない自己愛者 (the oblivious narcissist)

自己の構造を論じるにあたって、ナルシストの臨床像の二つのタイプを参照することは有用である。中でも Rosenfeld, H. は薄皮と厚皮というように、皮 (skin) という比喩的表現を用いている⁹⁾。筆者は自己の構造を説明するのに皮という比喩的表現は適切だと考える。筆者は村上のシールドという表現には、自己を保護する膜や境界という意味があると述べた。それはまさに“皮としての自己と”いえるだろう。Anzieu, D. は皮膚自我 (skin ego) という概念を提唱した⁹⁾。これ

は局所論的に形成される自我に先行して発生し、自我が形成された後にも残る原初的自己を示している。自己愛障害では皮膚自我の欠損があると考えられる。「皮としての自己」つまり自己の皮膚機能は、自己の構造の本質だと考えられる。村上はこれをシールドと叙述し、二つのタイプのシールドを想定した。それは軟らかく傷つきやすい心の核(中心部分)を守る内側のシールドと外界と接する外側のシールドである。筆者はこれらを内皮(inner skin)と外皮(outer skin)に相当すると考えている。

内皮は、自己の内側の脆弱性によって自己の核が壊れないようにする内向きの機能を有する皮である。コジマには、幼い頃から抱いていた“きれいなもの”、“すばらしいもの”、“よいもの”から排除されているという疎外感が表出して、自己の核が崩壊する危険があったと思われる内皮によってその疎外感を心の中に封印していたのだろう。これは人が毎日直接身につける下着のような機能であり、内側で発生した汗を吸収したり、身体運動による内的摩擦から身体を直接保護するなど、内的調整を行うものである。このような自己の構造における内皮機能は、発生的に母親機能に由来すると思われる。

外皮は、外界から攻撃や侵入からによって心の核が崩壊しないようにする外向きの機能を有する皮である。キジマは幼い頃から他人が自分の中にズカズカと土足で踏み込んでくることへの不安や恐怖を抱いていて、他人から侵入されることで自己の核が崩壊する危険があったと思われる。ボクシングを始めることで、その危険から自己を守っていたのだろう。これは人が日常的に身にまとっている上着のような機能であり、外側からの様々な侵襲から身体を保護するなど、外的調節を行うものである。このような自己の構造における外皮機能は、発生的に父親機能に由来すると思われる。

北山は、非日常語である「自我」や「自己」は抽象的で普遍的な主体の在り方を示しており、日常語である「自分」は具体的で個性的な表現である、と述べている¹⁰⁾。さらに北山は「自分」という表現を用いて「自分」を三重構造として捉えた。北山がいう三層とは、外層の「表の自分」、内層の「素顔の自分」そして内層の中にある「自分の中身」である。これらはそれぞれ「服を着ている自分」、「裸の自分」、「自分の腹の中」に対応しているという。筆者は北山が述べている自分の三層構造は、村上のシールドに対応していると考えている。軟らかく傷つきやすい「自分の中身」は、内層の「素顔の自分」という個人的なシールドにより守られ、外部からの侵入は、外層の「表の自分」という集団的なシールドによって守られている。つまり、「表の自分」は外皮、「素顔の自分」は内皮に相当すると思われる。

筆者は「皮」と、村上は「シールド」と、北山は「自分」と捉えているが、それらには若干のニュアンスの違いがあるだろう。「皮」は身体感覚を伴う比喩的表現であり、機能(function)を表しており、「被う」「包む」「守る」という母親の軟らかい保護的なイメージがある。「シールド」には、鎧や装甲など、戦いの中での父親の硬い保護的なイメージがある。「自分」は日常的で体験的な表現であるが、三層構造という記述は自我の構造論を思わせる点でユニークである。

自我心理学では、自我の防衛機制が論じられており、あらゆるものが防衛に利用可能だとされる。自我心理学と自己心理学を統合した理論展開を試みるならば、自己の脆弱性を防衛するために、内側の自己(個人的自己)や外層の自己(集団的自己)が利用されると理解できるかも知れない。

VI. コジマとキジマの病理とその周辺

最後に本作品の中に登場したコジマとキジマの精神病理について触れたい。二人は互いに自分と反対の自己像を相手の中に見出し、その相手の自己像に憧れていた。二人は、「現実の自己」と「理想の自己」との間の懸隔によって、自己像の揺らぎがあったと思われる。つまり二人には幼い頃から自己の脆弱性があったと推測される。

名なしの老人が言い残した「シールド」を探す長い旅は、コジマとキジマで違う道を辿ったようである。コジマは、少年時代には周囲に偽りの適応をしていたが、青年期に入って自己の傷つきや挫折を体験し、アイデンティは拡散していった。その後、引きこもり生活を続けたが、様々な自己対象体験(self object experience)を通じて、犬の訓練技術の修得やドイツ語習得の努力を継続し、一度は失った自信や自尊心を再び獲得していった。この過程は傷ついたナルシズムの修復過程でもあった。コジマにとっての自己対象とは、シェパード犬、臆病で過敏な犬のライカであり、さらにドイツ語を通じて出会った共感的な妻であろう。シールド探しの旅において、コジマは、内側のシールドを発見したのである。

キジマは少年時代には周囲に反抗していたが、青年期に入って努力と忍耐を通じて、着実に成功体験を重ねていった。その後、キジマは社会的・集団的シールドを身につけていった。つまりキジマは外側のシールドを身につけていったのである。だがキジマは中年期に社会的挫折を経験し、絶望の淵に立たされる。喪失体験を契機に、キジマはこれまでの自分の人生を振り返り、内側と外側の二つのシールドについて発見した。

コジマとキジマの二人に共通する病理は、自己障害といえるだろう。二人には内側のシールドと外側のシールドの両方に障害があったと思われるが、その程度には差があったと思われる。

コジマは幼い頃から“良いもの”から自分が排除されているような疎外感を抱いていた。これは内側のシールドの障害によると思われる。コジマはそれを補うために外側のシールドを代償的に用いていたのだろう。コジマは父親の仕事を継ごうとしたが、長続きせず、父親との同一化に失敗したといえる。コジマが高校生の時、自分が想いを寄せていたナダという女の子が他の男子に向かったことで、コジマの疎外感の心の中で活発化した。つまり内側のシールドが崩壊したのである。筆者が既に述べたように、内側のシールドが母親機能に由来するならば、コジマには母親との病理的関係があると推測できる。後にコジマの内側のシールドの形成を促したのは、共感的な妻との情緒的関係である。コジマの妻は共感的な母親として機能していたと思われた。

キジマは幼い頃から他人に踏み込まれることへの不安や恐怖を抱いていた。これは内側のシールドの障害に加えて、外側のシールドの障害があると思われる。筆者が既に述べたように、外側のシールドが父親機能に由来するならば、キジマには父親との病理的関係があると推測できる。後にキジマはボクシングで自信をつけて内側のシールドの修復が進むと、父親のコネを利用して、成功を収めていった。キジマには父親との同一化が起きていると思われた。大きな会社（集団）へ志向性は、その象徴といえるだろう。キジマが結婚した後、リストラにあった時に、義父に助けを求めたこともそれを反映していると思われる。

最後に二人の少年時代に出会った名なしの老人について触れる。名なしの老人は、どちらが頭が良いかという問題は無意味であると告げた。名なしの老人の名前は、その名の通り明らかでない。その老人は名乗らなくとも、確固としたシールドをもっているのだろう。老人が二人に主張したのは、価値の多様性と価値の自己決定性である。人が各々自分のシールドを発見できれば、自分の中に自己価値を見出すことができるであろう。自己価値を見出した老人にとって、名前はそれ

ほど意味がないのだろう。さて本作品の二人の主人公のコジマとキジマの名前はカタカナである。筆者にはコジマは“孤独”の孤島、キジマは、“帰郷”の帰島を表現しているような気がするのである。だが、本作品にとって、そして読者にとって、二人の名前の意味はそれほど意味がないのだろう。

Ⅶ. 結 語

本論文において、筆者は村上龍の『盾（シールド）』で示された仮説「傷つきやすい自己を守る二つのシールド」に対して、自己の構造の視点から精神分析的考察を加えた。傷つきやすい自己を守る内側と外側のシールドは、それぞれ内部からの不安の表出を封印する“内皮”，及び外部からの侵入を防ぐ“外皮”に相当すると思われた。外皮は父親機能に由来し、内皮は母親機能に由来すると思われる。

Ⅷ. 文 献

- 1) 村上龍：盾（シールド），幻冬舎，2006.
- 2) Freud, S.: *Delusions and Dreams in Jensen's 'Gradiva'*, SE. IX, 1907. [池田紘一訳：W・イェンゼンの小説『グラディーヴァ』にみられる妄想と夢，フロイト著作集第3巻，人文書院]
- 3) 岡田暁宜：杜子春と精神分析—苦行のパラドクス—，愛知教育大学紀要第55輯，2005.
- 4) Freud, S.: *Creative Writers and Day-Dreaming*, SE. IX, 1908 [高橋義孝訳：詩人と空想すること，フロイト著作集第3巻，人文書院，1969]
- 5) Kohut, H.: *The analysis of the self*. International Universities Press, Madison, 1971. [水野信義・笠原嘉監訳：自己の分析，みすず書房，1994]
- 6) Federn, P.: *Narcissism in the structure of the ego*, Imago, 1928.
- 7) 岡田暁宜：過敏な自己愛者に対する精神分析的な精神療法—逆転移の視点から—，47巻4号，精神分析研究，2003.
- 8) Rosenfeld, H.: *Impasse and interpretation*, Tavistock, London, 1987.
- 9) Anzieu, D.: *The Skin Ego*. Yale Univ Press, 1989. [福田素子訳：皮膚—自我，言叢社，1996.]
- 10) 北山修：北山修著作集—日本語臨床の深層（第3巻），自分と居場所，岩崎学術出版社，1993.

